

材の地ではある。建炎以來朝野雜記乙集卷十三を見ればはつきり書いてある。(東京松雲堂書店發行。定價金八圓)

(以上宮崎)

Feitige zur Wirtschaftsgeschichte der Targ-Zeit
(618—906) Stefan Balazs

本論文は著者の學位請求論文であつて、第一部は其の *Inaugural-Dissertation* として發表し、第二部第三部は柏林大學の *Mitteilungen des Seminars für Orientalische Sprachen* の第三十五年(1932)の極東編に收められたものである。流石に史料等も凡て根本的な漢文史料に據つて居、現在吾々東洋の支那史家達の通常用ひなければならぬ史籍は一二を除く外は殆ど總てが参照せられ、且つ其れが原文の儘、或は逐次譯として極めて多数に引用せられて居る。是は從來支那本土中世以前のかゝる方面に對する正確な文献史料に依る、考證的、新研究に劣つて居た歐米の東洋學界には稀に見る處であるから、本論文が「當地の東洋學界で仲々の好評を受けて居る」と云ふのも了解出来ると思ふ。

尤も論中諸處に、考證の上にも經濟史的觀察の上にも着想の見る可きものも無いではないが、然し結局支那史學中でも特に斯様な方面の研究の進歩し、既に加藤博士玉井教授其他の専門史家の優れた研究を有つ我國の東洋史家等には左程満足な與へるものではなく、別に論ずる程の事もなからず。(此の著者に限ら

ず歐米の支那學者の殆ど總てが未だ日本の優れた支那研究論文を讀破參照するに至らないのは遺憾である。)

但、本論文が次に掲げた目次からでも推測し得る如く、形式に於て唐代經濟史の全般をあらゆる方面から觀察し、之を綜括的系統的に纏めて居る點は價値を認むべきであらう。

(目次)、序文——史料 [I] 農業史 ①人口狀態 a 租稅表 (計帳) ト人口調査 b 都市ト農村 c 移住ノ自由ト流亡 ② 農業技術 a 灌溉 b 農業知識 ③ 八世紀中期マテノ農業狀態ト租稅制 a 土地配分 b 地租租稅及ビ賦役 ④ 封建制、大土地所有及ビ小作 a 實際的及ビ形式上ノ采邑賜與。貴族の歲入 b 國有地と屯田 c 大土地所有ト小作 ⑤ [兩稅] 改革 a 七八〇年迄ノ稅制變革 b 楊炎ノ改革

以上第一部(九二頁)が學位請求(柏林大學)の *Inaugural-Dissertation* (1932) として發表されたもの。

[II] 奴隸 [III] 寺院ノ經濟的役割 [IV] 金錢貨幣制度 ① 採鐵冶金 ② 造幣政策ト貨幣製造 a 八世紀中期迄ノ造幣獨占 b 貨幣價値下落。貨幣缺乏ト貨幣堆積 ③ 最初ノ紙幣 [V] 商業ト國家經濟 ① 交通制度 a 郵便ト情報勤務 b 貨物輸送 ② 商業 a 國內商業 b 外國貿易 ③ 專賣政策 a 鹽專賣 b 茶專賣 c 酒專賣 ④ 倉庫制度ト價格調節 ⑤ 經濟觀 以上第二部(II—VII三頁)は *Mitteilungen des Seminars für Orientalische Sprachen an der Friedrich-Wilhelm-Universität zu Berlin* (Jahrg. XXXV. 1932) に載る處である。尙自分には以

上の第一第二部の送附を受けたのみであるが、更に第三部として

(I) 八世紀末ノ經濟及社會的事情ニ關スル記錄 (II) 度量衡制度

(III) 經濟及經濟行政ノ術語アルファベート表

なる内容の附録が續刊される如くである。

● 我國に於ける滿蒙研究の發達 和田 清

● 最近三百年來日本關於滿蒙研究的史的檢討 蕭 桑

この二つの論文は共に我國の徳川時代以降現在に至る迄の滿蒙に關する主として歴史學的研究の發達を説述したものである。

我國の東洋學、特に其の歴史學方面が夙に卓絶的地歩を世界の學界に於て確保して來たことは勿論何人も否まない處であるが、今茲に其の斯學先人の輝く業績と、現時學徒の活潑なる研究成果とが(特に滿蒙のみに限定されてはゐるが)、此くの如き一つの秩序ある纏つた形に於て發表せられ、吾人に容易に系統的に其研究の進歩發達の跡を知らしめて呉れる事は最も悦ばしい事である。殊に今や滿蒙に對する我國の關係が政治的に軍事的に其他あらゆる方面に益々緊密ならんとすると同時に、其學術的研究も亦一段の飛躍を要する際に當つては、又極めて有意義と言はねばならぬであらう。

和田清教授の論文は雜誌歴史教育七卷九號(五二五—五四七

頁)に掲載せられ、其の第一、第二節に於て徳川時代及び明治最初期の我國滿蒙研究の狀を概観し、第三節以下第八節に至る六節は總て明治中葉以後勃興した科學的滿蒙史研究の事に屬して、或は諸家の學説を、或は又研究施設、刊行物の變遷を詳説して殆んど餘す處なしと云つてよく而も之が僅かに二十數頁の小文に收められてゐるのも却つて理解の上で好都合である。滿蒙史研究に志す者にとつて、之は從來の研究を知り、且つは今後の動向をも察知す可き一助ともなし得るものであらう。同時に又滿蒙に關する理解を深めようとする一般の人々に對しても極めて有用にして且つ興味あるものとして勧め度い處のものである。

蕭桑氏は民國國立師範大學「歴史科學」創刊號(一一八頁)に載る處のもので、前者と略同様の意味を有するものであるが、然し内容は遙かに簡單であつて前者とは殆んど比較にならないが然し大體の狀態を知らうとする上には之を以ても決して不充分とは思はれない。尤も前者が専ら純學問的立場にあるに反し、是は日本に於ける隆盛なる東洋學が如何に其大陸方面の國策に貢獻したるかを力説し、譏つて民國に於ける研究が清朝の滿蒙研究禁歴以來萎微遂に振はざる事を痛嘆し國民の憤起を促すと云ふ立場に發して居る事は稍注目に値しよう。(歴史教育七卷九號四海書房二・八〇)「歴史科學創刊號北平國立師範大學〇・一〇」(以上内田)